

# 医史学と私

遠藤 次郎

コロナ騒動で俄然、医学史の分野が脚光を浴びたように見える。かつて、このような人類の危機に立たされた時、人々はどのように対処してきたかを明らかにしておくことが、コロナ騒動の今後の見通しを立てる上で非常に参考になるからである。とはいうものの、今回のものは、これまでのものとはレベルが違う。これまでの伝染病は基本的には細菌レベルのもので、抗生物質が何とか対応できた。今回のものは不自然な形で形成されたウイルスレベルのものである。「ミネルヴァのフクロウは迫り来る黄昏に飛び立つ」と言われるように、今や医学哲学の再構築が急務なのではないだろうか。

本稿では「治身治国」（よく身を治める者は、よく国を治める）の立場にのっとり、始めに自からの心身の構造の形成過程を明らかにし、次に古典に見られる普遍的な心身の構造の形成過程について明らかにした。

人の長い人生の経路において、次の人生経路を決定づけるような「踏み石」を踏むことがある。本稿を書くことになったのをきっかけに、自分の人生を振り返ってみた。

## 九つの「踏み石」

1. 私は幼少の時期、木曾の山奥や北海道の自然の中で生活してきた。今考えると自分の最大の宝は「自然」がしっかりと身に付いていることであるように思える。

高校時代の頃だったろうか、山の中に立て籠って、天に向かって「宇宙の真理を授けたまえ。これを得ることができるのなら如何なる困難も乗り越えます」と祈願したことがあった。孤独好きな青年の他愛ないポーズだったかも知れないが、今となって振り返ってみると、これが一番目の「踏

み石」だったように思える。

2. 大学浪人時代、日本の仏像の美しさに憧れて、自分でも仏像を彫るようになった。物置を改造して、閉じ籠りひたすら仏像を彫っていたある時、フッと仏像と自分が入れ替わり、仏像が自分を彫っているような錯覚に襲われた。また、江戸時代？の自分が今と同じようにして仏像を彫っている場面にとらわれた。以来、神と人間との関係、過去の自分と現在の自分との関係等、生命体の持つ複雑な構造論を考えるようになった。八年程して、三年間インドに居住することになるが（アジア救済協会）、あるいは、この仏像とのやりとりがきっかけになっていたのかも知れない。

3. 三番目の「踏み石」は、長沢元夫先生との出会いである。東京理科大学薬学部に入學して間もない頃、長沢先生の講義を拝聴した。それまで煎じ薬や鍼灸の世界があることを知らないではなかった。ただ何となくうさん臭い、近づくに危険な世界として捉えていたが、大学教授がこれらの世界をポジティブに捉えているのに感動し、安心してこれらの世界の研究に没入できる切っ掛けを与えてもらった。

4. ヘーゲル哲学との出会いも自分の人生の経路に大きな影響を与えた。インドに三年間在住していた折に、友人がヘーゲルの『エンテュクロペディ』を送ってくれたのが「踏み石」となった。人間の持つあらゆるロゴスを体系づけたもので、極めて難解なものであった。こんな難解な書物は煩雑な時代を生きる日本の地では読めない。悠久の流れの場であり、インド哲学の発祥の地であるインドの地ではじめて読めるものであった。本書

の序文にある「当面諸君に要求したいことは、諸君が学問に対する信頼、理性に対する信念、さらには、自分自身に対する信頼と信念を持つということであります。……宇宙の本質は閉ざされているとはいえ、認識の勇氣に抵抗するほどの力は備えていないのであります。……」という言葉が、「宇宙の真理」を祈願した自分にとって、ほとんど天からの言葉のように受けとられ、以後、座右の銘として掲げることになった。

絶対精神に象徴されるヘーゲルの観念論、弁証法、マルクス等の唯物論を経て、生身の人間を基本に置いた実存主義へと哲学は変遷して行く。観念論が「天」とすると、唯物論は「地」、実存主義は「人」に相当する。私自身の哲学も「天→地→人」へとゆるやかに変遷しながら天地人論を体感するまでに至った。

時代が下って理解できたことであるが、『靈枢』にみられる「九鍼論」「九野論」「四診論」等の論理的展開は上に述べた哲学の論理的展開と近似している。「天地人時音律星風野」といった観念的九野論(天)が先行し、これを身体(地)に何度となく適用することによって、身体に即した四診論等が形成される(人)という流れである。

「人間の精神は原始的段階から徐々に進化発展していく」といった考えはやめたほうがいい。突然天から降ってきたかのような偉大なるロゴスを、人は徐々に消化吸収して自分のものにしていく。こんな見方をしなさいとヘーゲルの絶対精神は我々に教えているように思えた。

5. 卒業生の中に、いわゆる超能力者がおり、本人の精神不安定の件でしばしば長沢先生に相談に来ていた。長沢先生は超能力が好きで、その人を歓迎した。その人は、古代ヘブライ語？をペラペラ話したり、張仲景や李時珍を呼び出して対話することができる人であった。私は超能力を好まなかった。何故ならば話の内容が客観的でなく、どこまで真実なのかを証明するものがないからである。それにしても、人間はかくも深い世界を潜在的に持ち合わせているものかと感動した「踏み石」であった。

長沢先生は徹底したロゴスの人である。ロゴスの人が何故に超能力を好んだか、それは、超能力をどこまでロゴスで解明できるかに挑戦しているかのようにもあった。

6. ちょうど、長桑君が扁鵲に対して秘伝を授ける、と同じような場面に出くわしたことがある。ある時、天が私に対して「これより超能力を授けん」と言われた。これに対し、私は、「もし普通の人間が努力すれば体得できるような超能力であるならば有難く頂戴致します。特殊な超能力であるならば御遠慮申し上げます」と答えた。これで自分自身が扁鵲になるチャンスを逸したことになるが、この「踏み石」を踏んだ時の決断に関して後悔はしなかった。

私は何故か、自分が「普通の人」「一般の人」であることへのこだわりがあった。卓越した才能に対して否定的であった。何故に？それは一般の人を治療する時、「卓越した才能」や「超能力」を使って治療しても相手はそれを消化吸収することができず不成功に終わるからである。超能力を使うにしても、一般の人が理解できる範囲内のものでなければならない。だから私は天に対して「普通の人間が努力すれば体得できるような範囲の超能力」を祈願したのである。

7. ホメオパシー療法との出会いも自分の医学の論理構造に大きく影響を与えた。ホメオパシーの見方の漢方治療への導入である。「証」さえピタリ合えば、いくら微量にしても有効であるという確信から、漢方処方や単味の生薬を黒焼にしたり、さらには焼灰状態にしたものを乳糖で何百倍、何千倍にも希釈した。いくら希釈しても薬効に変りなかった。これをワセリンで練ってツボに塗布する外用薬も開発した。花粉症に対しては、患者の症状に合わせたものでなく、その年の「運氣」に見合わせた処方を選定し、ツボに外用塗布する方法で著効を得た。

湯液を行なう人々にとって、以上の治療法は意外性が大き過ぎてなかなか受け入れられなかったが、「気」を動かして治す鍼灸を行なう人々に

としては抵抗なく受け入れられた。

以上の治療法を単に「ホメオパシー療法の応用」とばかり言っていたらなくなっていた。漢方治療の医学的論拠は自らの医学の中に求めなければならない。そこで『靈枢』の中にその医学論拠を求めた。『靈枢』の九鍼論を述べた所に「夫れ九鍼なる者は、これを小にすれば則ち内なく、これを大にすれば則ち外なく、深きこと下となすべからず、高きこと蓋となすべからず」とある。九鍼は、「天地人時音律星風野」といった多時空的九野を内蔵しているという意味である。一般的に言って、医学理論を身体に適応すると、その医学理論は生命体が本来持っている多次元、多時空の世界に展開する。ホメオパシーの「いくら希釈しても薬効は変わらない」という理論も以上のように捉えるべきなのであろう。

8. 『靈枢』『素問』の研究において白川静氏の文字学との出会いも極めて重要な「踏み石」であった。白川文字学において、重要な漢字は呪術的に捉えられている。呪術の世界から抜け出した現代において、いまさら、と見る人も少なくない。しかしながら、漢字のスタートは甲骨文字である。この甲骨文字は亀甲を灼いて天の意向を占うときに質問事項を亀甲に彫り付けたものである。このような文字が呪術性を持たないわけがない。確かに文字自身も進化発展して行き、いつまでも呪術性を持つものではないが、その文字の原義、原点を掴んでおくことは極めて重要な事で、その原義からどのように進化発展して、今解釈しようとしている文字の意味に至ったかを捉えるものでなければならない。

亀甲の一点を灼いて卜形の裂け目を作り、天意を占うやり方は、奇妙にも、鍼灸治療と共通する。鍼灸治療の最も基本的な「経脈」は、実は、天から人間の身体に降ろされた「天の規範」である。外界の基準である三陽三陰の経脈に身体の陰陽形気を乗せる作業が鍼灸治療に他ならない。この陰陽形気論的治療法は、陰の亀甲に陽の灼を加えることにより、質問事項を陰陽に還元し、天意の現れである道筋を天地人の「卜」形の中で捉えよう

とする亀甲占いに通じる。また、これらの立場は易占等にも通じる。以上の例に見る如く、『靈枢』『素問』の医学理論の根底には呪術的要素が多分に存在し、この世界を解釈するのに白川文字学なくして解くことはできない。

9. コロナ禍という「踏み石」は、これまでの自分の医学理論や治療法を徹底的に深めるように働いた。

大学を定年退職して、やっと時間が取れるようになり、本腰で『靈枢』『素問』をはじめとする古典籍の研究ができるようになった。5~6年後、やっと成果が出るようになり、「靈枢の構造—靈枢は下の篇から構築された—」(2014)、「靈枢は素問より古い」(2016)、「形気論」(2027)、を森立之研究会で発表した。これらの成果を著書にすべく執筆活動をした。「靈枢、素問の構造と論理」と題し、700頁近い著書を出版するつもりだった。ところが、書き上げてみると何だかまったく気にいらず、書き直し作業が始まった。はじめは部分的な訂正だったが、その内、全面改訂となり、全面改訂を何度となく繰り返す羽目になった。もう出版はあきらめようかと思っていた矢先のコロナ騒動である。出版などと言ってられない。いままで学んできた医学論理をフルに使ってコロナ禍対策の実践作業を行なった。この結果、「天人相感論」「陰陽論」「形気論」「天地人三才論」「四診論」「治身治国論」「九鍼論」等々の論理が妙にリアルに体感できるようになった。

具体的な治療法としては、最も基本的な陰陽論に則り、陰陽形気論による解体再構築の方法や「天円地方の交流」の方法を基本にして行った。

コロナ禍対策はこれまでの身体内における治療法ではラチが開かず、地球レベルでの対策が必要である。その意味において『靈枢』の天地人三才の哲学に則った医学理論は有効である。

コロナ禍対策を実行して、これまでの自分の医学理論の甘さを痛感した。もし、この先、本を出版することができたとしたら、コロナ禍に謝辞を述べなければならないであろう。

以上が自分がこれまで歩んできたいわゆる人生哲学に関する九つの「踏み石」である。『靈枢』『素問』等にみられる医学理論を研究する過程で、これまで踏んできた九つの「踏み石」が医学理論を確認する大きな役割を果たした。以下その具体例を九つにまとめて示した。

### 陰陽形氣論

『靈枢』『素問』の医学理論の根底に、陰陽論と共に形氣論があることを主張した人はほとんどいない。『靈枢』『素問』を著した人々でさえ、どこまで形氣論の重要性を自覚していたかは疑問である。

形氣論の「形」は形という実体を持ったもの、「氣」はその実体の運動を意味する。ここで注目しなければならない点は、「氣」にしても「形」にしても、陰陽論に相当するような初源的な宇宙論的な意味合いを持つという点である。なお、「形氣」の用例は『靈枢』17例、『素問』14例、「陰陽形氣」は『靈枢』邪氣藏府病形に1例あるのみで、陰陽論に比してはるかに少ない。

『素問』天元紀大論に以下の条文がある。「形氣」の例の中で総括的な論はこの1例のみである。

①在天為氣，在地成形，形氣相感而化生万物矣。

①の条文は、『素問』陰陽応象大論にみられる以下の条文をもとにしたものである。

②陰陽者天地之道也，万物之綱紀

③陽化氣，陰成形

④清陽為天，濁陰為地

すなわち、陰陽は本来「日陰と日なた」を意味する言葉であるが、陰は「雲」的な要素を含むことから、陽と陰は④清陽濁陰の見方に展開する。この段階の陰は、いわゆる「暗雲」の段階で、例えば「雨」といったような明瞭な「形」を形成するまでには至っていない。この段階を経て、次に③「陽は氣に陰は形」へと展開する。そして形氣はさらに展開して具体的な万物を形成する。

ここで注意したい点は、①は「陰陽→形氣→万物」の論であるので、ここにおける「形氣」は万物に至る形成過程を意味するという点である。一般的に万物に至る過程を陰陽論だけで説明しようとすると「陰中の陽，陰中の陰」といったような非論理的なものになってしまう。現実に即した陰陽論の展開は「陰陽→形氣→万物」論でなければならない。

### 陰陽の対立

『素問』陰陽応象大論にはさらに以下の条文がある。

⑤天地者万物之上下也。

⑥陰陽者血氣之男女也。

⑦左右者陰陽之道路也。

⑧水火者陰陽之徴兆也。

②の「陰陽者天地之道也」は「陰陽は最初に天地に展開する」ことを意味する。さらに、陰陽は上下⑤、男女⑥、左右⑦、水火⑧等対立する概念に展開する。このように陰陽論は対立の概念で構成されているというのが最大の特徴である。仮に陰陽論から形氣論に展開されたとしても、形氣論の中でも常に対立構造を示す。陰陽にしても、形氣にしても、常に対立関係にあるのは、万物を分子、原子、素粒子のレベルにまで解体しても、常にプラスとマイナスの対立関係が維持されているからであろう。

### 五運六氣論

①の「在天為氣，在地成形」の論は『素問』運氣七篇中の一つ、天元紀大論にみられるものである。したがって①の条文には五運六氣の運氣論の見方が根底に存在すると見なければならない。五運六氣は、「地の五運と天の六氣」の運行を意味する。したがって、術数的に言うと、五は地の数、六は天の数ということになる。この五と六の数字は陰陽形氣論的にも重要な意味を持っている。すなわち、天の六氣の六は、陰陽、陰陽、陰陽と無限に対立運動をしながら天空に拡散する偶数の運

動の一例を示したものであり、地の五運の五は、天の偶数の拡散運動に対して地の実体性のある重みをつけながら、運動の中心に「1」を措定して奇数を作り、この拡散運動を固定するという一例であると言える。

『素問』運氣七篇の運氣論は後の時代の観念的な論理大系なので相手にしないという立場が今日の大勢を占めている。確かに今日見る運氣七篇等を見ると論理が煩雑を極め、手のつけられない状況にあるが、根底となる五運六氣論は決して新しい論理ではなく、以下に示すように『春秋左氏伝』の中に明確に示されている。

『左伝』の昭公元年に、医和の語った病因論として

- ⑨「天に六氣あり、降って五味を生じ、発して五色となり、徴して五声をなす。淫ぐれば六疾を生ず」

と記している。ここにおける六と五の論は五運六氣の意義をそのまま反映している。すなわち、六氣、六疾は形気の気の属性が強く、偶数的拡散状態にあり、五味、五声等は、天氣の地に降り立って、地の要素と結合した状態なので、奇数的固定状態にある。

『靈樞』に見られる九宮八風論なども同様に考えることができる。八風は偶数的形気の気の動き、九宮は、八風が循環する八つの宮、プラス中央の一つの場を加えた奇数的形気の形の論理である。もっと一般的な例として「五藏六府」論等も同様の例であろう。

ここで偶数、奇数論についてふれておきたい。五藏六府の例からも明らかなように五の奇数は陰数、六の偶数は陽数（五藏は貯蔵で陰、六府は運搬で陽）のはずであるのに、一般的には「奇数は陽数、偶数は陰数」といわれている。この一般論は曆学由来し、例えば「九月九日は重陽の節句」と言われるように、九を至陽の数字とみなしたことに由来する。確かにその世界での真理はある。しかしながら、医学関連の世界では「奇数は陰数、偶数は陽数」であり、曆学的な世界の規範を無造

作に導入すべきではない。

## 陰陽五行論

これもまた一般的に言われていることではあるが、陰陽論から次に展開するのは五行論である、と。五行論の扱い方は人により様々であるが、図式的で観念的な五行論は現実にはそぐわない部分が多く、嫌う人も多い。五行論の源泉的な図形は、東西南北の四方に中央の一点を措定したものであり、この図形はすでに論じた陰陽形氣論における「偶数的天氣が奇数的地形に固定される」論の一つの用例と見ることができる。以上の例からもわかるように陰陽五行説は本来、陰陽形氣論に属し、陰陽形氣論の一部分の説を固定し展開させたものであると見なすことができる。一方、五行論は「五」という数の術数的意味合いが強い。五行論が世に広まったのはこのためである。ことに『素問』では五行論が主導的役割を担っている。

## 四 診

「望聞問切」の四者は診察法の基本として今日でも生きている。この四つの診察法は扁鵲の時代にすでに存在し、『靈樞』『素問』においても基本的な診察法である。四診の原義を追求すべく、『素問』陰陽応象大論の以下の診察論理を検討した。

- ⑩ i 察色按脈、先別陰陽、審清濁而知部分  
ii 視喘息聽音声而知所苦  
iii 視權衡規矩而知病所在（素問は主、太素の在をとる）

以上の診察論理を四診と比較すると、i が望診（色）と切診（按脈）に、ii が聞診、iii が問診に相当する。i ~ iii の四診論を陰陽形氣論と照らし合わせてみると、i が陰陽論（先別陰陽）、ii が形氣論の氣に、iii が形氣論の形に相当することがわかる。i の察色按脈を「先別陰陽」と解説したのは、察色按脈がまず天地に通じる陰陽を診察するためのものであることを意味している。按脈といっても細かい脈診の意味ではなく、手の指先、または足底から導入される地の気を持った脈を切する意

味である。iiiの問診の意味はいささか難解であるが、『靈枢』邪氣藏府病形篇ではiiiに相当する所を「問其病而知其処」としているところから、問診は、病形が移動するパターンの病に対し移動する病処を問診する意と解される。

以上のように「望聞問切」の四診は、外界の天地に通じる陰陽と、身体内における形氣（人氣）を診察する陰陽形氣論にのっとったものであると理解することができる。また、他篇における諸々の診察法を見ても「色脈」診が基本になっており、四診は「陰陽→形氣→万物」を診察するための基本的な診察法であると見ることができる。

### 易の構造

易の基本構造は太極から陰陽に分裂し、その陰陽が分裂を繰り返しながら形氣を作っていくことから「陰陽→形氣→万物」の構造論であるとばかり思っていたが、実際の易占の作業は明らかに異なっている。実際の様子を見ると、著（めとぎ）に向かって問筮（何を占うか）し、筮儀を行ないながら陰爻または陽爻を出し、これを下から積み重ねていく作業をする。積みあげた陰陽爻を三つずつ区切って一つの単位として、積みあげられた三爻の変化の意味を読解する方法を採っている。

ここで注意したい点は、問筮に対して、ただひたすら陰陽の爻の積み重ねで答えているという点である。一般的には積み重ねによって、陰陽から具体的なモノ（形氣論など）へと展開していくと考えがちであるが、易においてはあくまで陰陽にこだわっている。実際の「陰陽→形氣→万物」の作業は筮儀を行なう人がこれまでの「太極→兩儀→四象→八卦」等での解説文等を参考にしながら行っている。

陰陽の爻の積み重ねは陰陽の経時的変遷と見ることができるであろう。易の意味は「変易（かわる）に由来する」といわれるように陰陽の経時的変化をどのように把握するかが難しい。いずれにしても、陰陽の原材料しか与えられていない段階のものを「陰陽→形氣→万物」の作業をやったのけなければならぬ筮占を行なう人の責任は極めて重い。「筮占は聖人の業だ」といわれるのも以上の

易の構造上の問題を見越してのことと見ることができよう。

### 天円地方の交流

天人相感の最も基本的な構造論である「天円地方」の意義を明らかにしたい。『靈枢』邪客に以下のようにある。

- ⑩ i 天円地方、人頭円、足方、以応之
- ii 天有日月、人有兩目、地有九州、人有九竅、
- iii 天有四時、人有四肢、天有五音、人有五藏、天有六律、人有六府

i, ii, iiiともに天人相感の実例であるが、正確に言うと「天円と地方が交流して人に影響を与えた」天地人相関論である。

天円も地方も円と方の「形」を表現したものであるが、円は閉環円の運動を表現していると理解するならば、「天円地方」は「天の氣と地の形」に基づく形氣論であると見做すことができる。地方の「方」は地の四隅を意味する。四隅は「角力」の力が入り、踏ん張りのきく場である。ましてや、実体性を持った地の性質を持っているので力を発揮することができる。但し、地方のもつ力は踏ん張るといふ静的な力であり、動的なものではない。動的な動きは天円の氣の運動性に頼らざるを得ない。天円と地方の交流によって、天円は実体性を持った閉環運動を獲得し、地方は運動性を持った角力を獲得することができる。

以上の天円地方の交流論は「陰陽→形氣→万物」論を展開させるための基本的な論である。円と四角という最も単純な形氣が交流しあって、どんどん複雑な形氣が作られ、最後に万物が構成されるという論理構造である。ii, iiiの数字に絡ませた議論は、九野論に見られる「一天、二地、三人、四時、五音、六律、七星、八風、九野」や「九宮八風」論にも繋がるものである。「天円地方の交流」が九野や九宮八風といった宇宙構造まで形成すると見ることができる。見方によっては「天円地方の交流」は万物を生み出すエネルギー源であるということもできるであろう。

もう一つ⑩の天地人相関論における「人」の役割をどう捉えるかが問題になる。単に天地陰陽が合体して「人」が形成されたという平面的な捉え方もできるが、天地の交流により複雑極まりない生命体としての「人」が形成される、という見方もある。次項で述べる九鍼論に見られる天地人論は後者の見方に属する。

### 九鍼論，九野論

『靈枢』九鍼論第78に、九野（天，地，人，時，音，律，星，風，野）に法（のつ）った九鍼論が論じられている。この廣大無辺な論を解説すると以下のようなものである。九野は天地人論を基本にし、「天地人」が「時音律」と「星風野」に展開した3×3の論である。「天地人」はそれ自体「天地を内蔵した生命体的人」の意味合いを持っているから、これを一つの単位とした天地人論（3×3）は廣大無辺の論となる。例えば人間世界の社会構造を意味したり、人間をとりまく大宇宙の構造論になったりする。九鍼論においては、九鍼を身体に適用させた時の多時空的な身体の意味を持つ。

『靈枢』は九九八十一篇より成るが、九鍼論（第78）は、下の篇から九つ目（第73官能篇）で第1回の編纂作業が行われ、この九篇が基になって九九八十一篇が形成されたという事実を追跡確認することができる。『靈枢』の古い名を『九卷』と言ったが、書物全体の、中身から形式まですべてにわたって「九」論に基づいていることがわかる。『素問』が五行論の五にこだわったのに対して『靈枢』は九鍼九野論の九の術数にこだわったと言うことができよう。

「九」は窮極の数字の意味合いであるが、このような術数論が現実の場面に反映されるのであろうか。もし、これが現実化されるとしたら、身体そのものが、九野論に基づいて反応をするからである。ことに、古代の人間は天地人相関の世界に住んでいた。現代人にとって廣大無辺のあり得ない九野論も、古代の人間にとってはあり得る話なのである。その意味において古典に基づいた本来の九鍼を使って治療したいのであれば、治療者も患者側も古代の人間の持っている感受性に戻して

治療する必要があるのであろう。

以上、何か理想的な治療法を述べているかのようにも受けとられるが、実際にやってみると、「九」に縛り付けられた、いかにも苦しい世界である。天地の二極に人が押し入れられ苦しうにしている「亟」の文字を想起させる場面である。やはり現代人は現代人にマッチした治療をすべきであらうか。

なお、九野論の段階になると陰陽形気論は通用しなくなる。というのは、天地人論は、「陰陽形気→万物」論を短縮した形と見ることができるが、天地人が3×3に展開するとなると、陰陽形気の対立論は通用しなくなるからである。

### 小 鍼

『靈枢』における窮極の治療は「九鍼」を使った治療とばかり思っていたら最後にどんでん返しがある。「靈枢は下の篇から積み上げられた」という原則に則るならば、最後の篇は最初の篇の「九鍼十二原第1」である。ここでは「小鍼，微鍼」を使った治療法を主張している。形気論で言えば形気の氣に注目した治療法である。日本の鍼灸は毫鍼といった、か細い鍼を主に使っていることからこの微鍼の流れを継承しているように見える。ただ、不思議なことに九鍼十二原篇では盛んに九鍼についても論証している。これはいったい何なんだろう。九鍼十二原篇の主たる治療は関節における「節氣」の治療であるように見える。九鍼における第一～第五鍼は「皮肉脈筋骨」の形気の形を対象とし、最後の第七，八，九鍼は身体深部の精氣を対象としている。細くて長い鍼である第七鍼の毫鍼も後者に属する。九鍼十二原篇では関節内の精氣の治療にこの毫鍼を応用した。この毫鍼を拡大解釈して「小鍼，微鍼」として応用するようになったと理解することができる。九鍼十二原における「小鍼，微鍼」の展開は、古くからの九鍼論を継承しながらもさらに一歩前進させた形なのであろう。『靈枢』外揣に「渾束為一」の論が見られる。外揣篇第45は九九八十一篇のちょうど半ばに位置し、『靈枢』後半部の見直しがあった篇である。『靈枢』の前半部に「一」の用例が急に増えて

いるところから察すると、九鍼十二原篇における「小鍼，微鍼」の主張も九鍼を「渾束為一」としようとした試みであったのであろう。

九鍼十二原では関節の持つ「機」をテーマに行っている。「機」は「気」の段階よりももっと複

雑で、精気の気に相当する概念である。今日的に言うならば「機序」に相当する。九鍼十二原の段階では単に鍼の「形」を新しくしたばかりでなく、形気の気を「機」の段階にまでレベルアップしたと見ることができよう。